家族との関係に着目した発達障害者に対する就労支援
～家族に対するアプローチを含めた包括的な支援について～

○鈴木 靖子（宇都宮公共職業安定所　精神・発達障害者雇用サポーター）
○金田 則子（宇都宮公共職業安定所）

１　はじめに

宇都宮公共職業安定所・専門援助部門では、精神・発達障害者雇用サポーター（以下「SP」という。）が配置され、精神障害や発達障害のある求職者に対し、障害特性を踏まえた相談・職業紹介の他、必要に応じて医療機関、各支援機関と連携し、アセスメント、職場開拓、職場実習、雇用後の定着支援といった一連の就労支援を行っている。

発達障害を抱える方々は、その特性故に短期離転職を繰り返すことが一つの課題であるが、その背景に家族関係、特に親からの影響が否定できないケースもある。

本報告では、家族との関係性が本人の就労適応に与える影響と、他機関と連携しながら本人と家族の相互理解を得るために行った支援の事例を紹介する。

２　発達障害者と家族関係についてのアンケート調査

今回、発達障害者から見た家族関係を確認するために、日頃より連携している医療機関Xの協力を得て、発達障害者に対し、家族関係に関するアンケート調査を行った。「家族関係が良くない(悪い)」と回答した方は全体のおよそ３分の１にあたる32%。その内訳で「親」を挙げた割合は82%であった。その理由として「態度・過剰な関わり・兄弟との差別」といった関わり方を挙げた方は70%（図１）。そう感じ始めた時期に対する質問で「幼少時から」と回答した方は62%と半数以上に及んだ。更に就職活動・就労に関して「相談しにくい、相談しようと思わない」との回答は51%であり、その理由として日常的な関わりが影響していることを示すものであった（図２）。

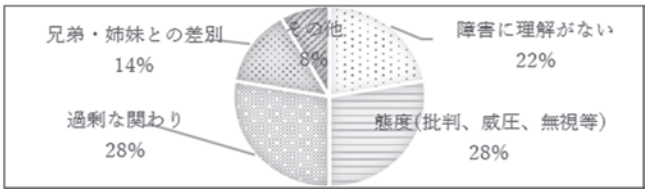

図１　家族の関係がよくない(悪い)と感じる理由

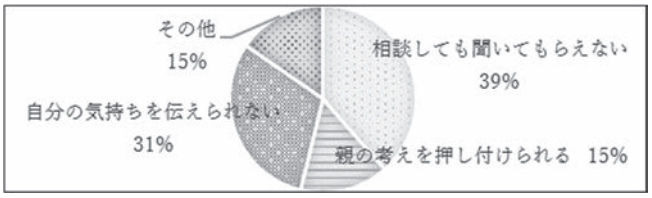

図２　就職活動・就労について相談しにくい理由

アンケート結果は、当事者の就労支援において、家族関係も考慮する必要性を再認識するものとなった。

３　ケース概要と初期経緯

Aさん：30歳代　男性　自閉スペクトラム症（以下「ASD」という。）　両親と同居　独り子

Aさんは、専修学校卒業後、障害クローズにて金属加工会社へ正社員として就職。しかし、現場の仕事にうまく適応できず、部署異動を繰り返す。「自分はダメな人間だ」と落ち込む度に、周囲からは「気持ちの問題」「もっと頑張れ」と言われ、さらに自信を失っていった。

しかし、親に知られると「叱られる」「見捨てられる」との思いから、その状況を一切話すことができなかった。

やがて出勤前には、締め付けられるような胸の痛み、手足の痺れ、運転中の見当識の異変が現れるようになった。就労の継続に不安を感じ、当所への相談に至る。

就労中だったため、当初は電話相談にて対応していたが、入電はほぼ毎日と頻繁になり、内容も緊迫性を帯びてきたため、電話対応に限界を感じ来所を勧める。

初回面談では「辛い」「このまま消えたい」と繰り返している状態。危機介入の必要性を感じ、本人の了承を得て母親に連絡し状況を説明。医療機関Yへ繋いだ。受診の結果、うつ病と診断され休職となるが、Aさんは頻繁に来所しては「苦しい」「親に見捨てられる」と繰り返す状況であった。「求人を持って帰れば親に何も言われないかもしれない。」と求人票を持ち帰る状況が続いた。

４　親に対するアプローチの必要性について

Aさんとの面談を進めるに従い、状況悪化の背景に、親の関わり方が影響しているのではないかと思われた。

実際、今回のメンタル不調、休職・離職に関しては、「怠けている」「粗大ごみ」「働かないなら出ていけ」等の発言や、「無職の人に出す食事はない」と家族団らんの場面から排除する言動もあったという。

また、ASDの診断については、「うまくやれないことへの言い訳だ」と言われ続けていると悩んでいた。

このような状況から、Aさんの安定した生活、就労を支援するためには、Aさんのみならず両親に対しても相互理解を求める必要があると考えた。Aさんの現状を適切に理解し、お互いの関わり方に対する課題の気づきを促すことを目的とし、医療機関Y、各支援機関と連携しながら親に

対するアプローチを含めた支援を展開するに至った。

5　親に対するAさんの課題と就労に対する影響

Aさんとの面談、医療機関Yとの情報共有により、親との関係性について次の点が主な課題として浮彫になった。

①「親の価値観」を最優先し自己決定できない。

②失敗は「親の期待を裏切ること」という歪んだ認知。

③家庭に安心できる環境がなく不安状態に陥りやすい。

④自分の気持ちや考えを整理して伝えることが苦手。

ASDの障害特性と相まって、これらのことが、「親に本音を伝えることができない」という、最も重要な課題を生じ、就労の安定を損なうことに繋がっていると思われた。

6　支援経過とAさんおよび両親の変化

⑴　親の意見を最優先に行動する時期

・Aさんの経過：休職→復職→再休職→転職（特例子会社）

・親：療養が必要な状態に対する理解がない。主治医の意見に反論してでも復帰・転職を急がせる。

・Aさん：「家に居場所がない」と頻繁に来所する。「本当は家で休養したい」と言えず、親に従って復職・転職する。結果として体調の悪化を繰り返す。

・SP：両親と面談。仕事のミスマッチが心身不調の一要因であること、十分な療養が必要であること等説明するも、理解を得ることはできなかった。

・連携：「栃木障害者職業センター」職業評価の実施。結果説明に母親出席。障害者職業カウンセラーより障害特性と職業適性について説明。母親は、その内容には納得していたが、特性に適した就労を考えるという理解には至らなかった。

「医療機関Y」ケース会議実施。両親出席。主治医と連携し、安心して療養できる家庭環境の必要性と重要性について理解を求める。

・結果：母親は徐々に状況を理解する。父親は変わらず。

⑵　自己主張ができるようになった時期

・Aさんの経過：退職→療養→デイケア利用

・親：母親は療養に理解を示すようになる。父親も「いつ働くのか」と言いつつ、以前ほど批判はしないとのこと。

・Aさん：「家にいやすくなった」と心身は徐々に安定。しかし、父の言動に「元気になってきたのに家にいて申し訳ない。でもまた失敗するのが怖くて働けない」と自責と葛藤が生じる状況。辛くなるとハローワークに相談来所。

・SP：自分の気持ちや考えを自ら親に伝えられるよう支援。また、社会復帰への不安軽減目的に、デイケアの利用を主治医に相談してみるよう促す。

・連携：「医療機関Y」ケース会議実施。両親出席。主治医、医療スタッフと連携し、スモールステップの重要性とデイケア利用の必要性について理解を求める。

・結果：父親は「動ける状態なら働くべき」と反論したが、Aさんは「今の僕には準備期間が必要」と両親にデイケアを利用したいと主張。話し合いの中で、父親は「親の期待が破綻して、息子が置かれている現実を突き付けられた気がした」と述べていた。

⑶　自ら意思決定し自立する時期

・Aさんの経過：就労継続支援B型事業所→就労継続支援A型事業所（以下「A型」という。）→グループホーム入居。

・親：母親は、A型やグループホームの見学に同行する等Aさんを支援するようになっていった。父親は離職状態に不満が募り、「働かないなら出ていけ」と言い始める。

・Aさん：周囲と相談しながら自発的に行動することができるようになる。母親との関係に安心感を得て体調は安定を維持。自己理解も進み、自分の状態に合わせ就労へのステップを踏んでいくことができるようになる。

・SP：Aさんの自己決定に向けた相談支援、後押し。

・連携：「医療機関Y」主治医、医療スタッフとの情報共有。就労支援の方向性についての意見交換。

「障害者就業生活・支援センター」生活と就労について一体的なサポートを得るために連携を開始。情報共有。

・結果：Aさんは母親と良好な関係を継続できており、SPから親に対するアプローチは必要がなくなっていった。

A型就労は２年目となり安定。グループホームへの入居を自分の意思で決定し、親からの自立という自己実現を果す。実家での居心地も良いと語り、今得られている安心感が就労も含む生活全般の安定に繋がっていると考える。

7　まとめ

当初は、Aさんに対する親の関わり方は一方的であり、理解を求めることは困難に思えた。しかし、私たちの介入を拒否しない様子に変容の可能性を感じ、アプローチを続けていった。そして、Aさんの「転機」を捉えて親への介入を図り、状況に応じて必要な機関と連携しアプローチを重ねた結果、段階的に相互理解が進むことに繋がった。

長い年月をかけ形成された家族関係に介入することはとても難しく、この事例のように、双方の変容に合わせた粘り強い支援が必要であると考える。

医療機関Yおよび今回本報告を行うにあたり家族関係のアンケート調査に協力いただいたXの医師は、ともに「生きづらさを抱える発達障害者にとって、安心できる場所（家庭）があることは、自分が存在してよいという認知に繋がる。安定した社会生活の基盤として、本人と同じ目線で一緒に考えてくれる家族の存在がとても大切である」と述べており、発達障害者が安心して相談し、就労の安定を継続していくためにも、家族関係を視野に入れた支援はとても重要であると考える。